JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2019年
No. 95
2019年2月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2019 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

小中学校における性的マイノリティへの支援の現状と課題 …… 1
思いこみのめがね⑪ …… 7
性教育の現場を訪ねて㉓ …… 8
多様な性のゆくえ㉒ …… 10
今月のブックガイド …… 11
JASEインフォメーション …… 12

小中学校における性的マイノリティへの支援の現状と課題

全国調査の自由記述から

静岡理工科大学情報学部准教授　本多明生

はじめに

性的マイノリティ（sexual minority；セクシュアル・マイノリティ、性的少数者）とは、生まれたときに振り分けられた性とは異なる性を自認している人や、恋愛対象が同性の人など、多数派とは異なる性のあり方をもつ人々の総称である。この中には、LGBT（レズビアン（Lesbian）：女性同性愛者、ゲイ（Gay）：男性同性愛者、バイセクシュアル（Bisexual）：両性愛者、トランスジェンダー（Transgender）：身体の性と心の性に違和感を抱える人）、性的指向や性自認がはっきりしていない、定まっていない、どちらかに決めたくないと感じるなど、特定の状況にあてはまらないQ（クエスチョニング）と呼ばれる人、性分化疾患の人などが含まれる。

日高（2017）によれば、我が国では、（1）性的マイノリティ当事者の6割が学校生活でいじめ被害の経験があること、（2）同性愛に関する知識を学校教育において異常なものとして習った、否定的な情報を得たと回答した当事者が2割をこえるなど、性的マイノリティの児童生徒は学校生活で様々な困難に直面することが指摘されている。

このように、我が国の教育現場では、性的マイノリティへの配慮が乏しかったが、「個人の性的指向や性同一性を理由とする暴力や差別を許さない」という人権擁護の動きは、その状況を少しずつ変えつつある。事実、文部科学省は、平成27年に「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を、平成28年に「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」を通知しており、昨今、性的マイノリティの児童生徒への支援や配慮が推進されている。これらの通知では、性的マイノリティの児

童生徒が悩みを相談できるように、教職員らによるサポートチームをつくることや学校生活での支援の事例を紹介するなど、きめ細やかな配慮を行うことを求めているが、実際の対応はそれぞれの学校に委ねられている。

我が国の教育現場において、今後、性的マイノリティの児童生徒への支援を充実させていくためには、現時点における学校の支援の実態を明らかにする必要がある。しかしながら、これまで、同様の試みは行われていない。このような背景から、筆者は、小中学校における性的マイノリティへの支援状況に関する調査研究を行ってきた（矢崎・本多 , 2016; 2017; 2018, Yazaki & Honda, 2018）。

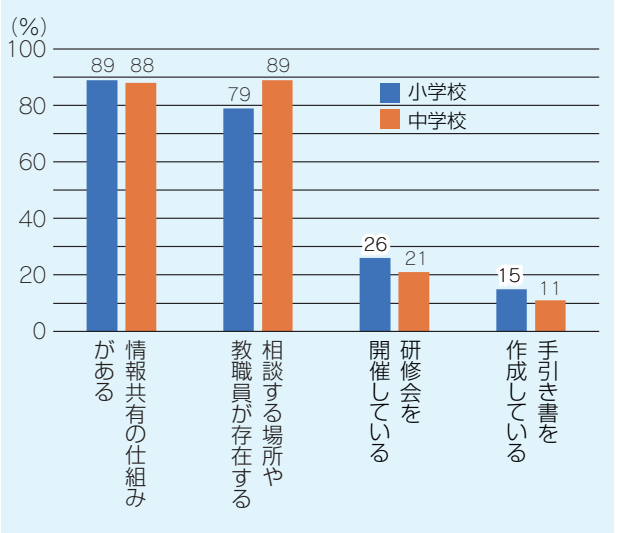
本稿では、筆者が 2017 年から 2018 年にかけて実施した小中学校の性的マイノリティ児童生徒への支援に関する全国調査の自由記述から、支援の現状と課題についてアプローチする。この調査では、最後の設問で、現在、性的マイノリティへの支援や配慮で悩んでいること、考えや意見を自由に記述することを学校長に求めた。多くの全国調査では、アンケート調査から得られる数値指標が議論の中心となることが多く、自由記述の内容が紹介・検討されることは少ない。本稿では、自由記述から得られた全国の学校長の声に向きあうことで、小中学校における性的マイノリティへの支援の現状と課題を考察する。

調査概要

筆者が 2017 年から 2018 年にかけて実施した小中学校の性的マイノリティ児童生徒への支援に関する全国調査の概要と結果の一部を紹介する。

小学校の調査は、2018 年 2 月 17 日に、学校住所録から系統抽出法によって無作為抽出した全国の 3,700 校の学校長に調査用紙を郵送し、回答を依頼した。調査用紙は、学校全体での支援・配慮に関する質問 14 項目（各質問項目に「はい」もしくは「いいえ」で回答する 2 件法形式）等から構成されていた。同年 3 月 30 日までに回答が得られた 874 校（回収率 24%）のうち、有効回答が得られた 866 校の結果を分析した（有効回答率 23%）。

中学校の調査は、2017 年 10 月 28 日に、学校住所録から系統抽出法によって無作為抽出した全国の



学校の支援体制の状況（複数回答）

1,800 校の学校長に調査用紙を郵送し、回答を依頼した。調査項目は、小学校の調査とほぼ同じであった。同年 12 月 26 日までに回答が得られた 522 校のうち（回収率 29%）、有効回答数が得られた 518 校（有効回答率 29%）の結果を分析した。

分析の結果、性的マイノリティの児童生徒について教職員間の情報共有の仕組みがある学校（小学校：89%、中学校：88%）や児童生徒がセクシュアリティについて相談する場所や教職員が存在する学校は多いが（小学校：79%、中学校：89%）、それが児童生徒に周知されている学校は少ない（小学校：24%、中学校：30%）ことがわかった。

そして、職員向けの研修会を実施している学校（小学校：26%、中学校：21%）や教職員向けの手引きを作成していた学校（小学校：15%、中学校：11%）も少ないことも明らかとなった。

したがって、調査結果からは、小中学校では、教職員が性的マイノリティについて学習する機会が少ないこと、児童生徒への情報提供も行われていないことから、相談体制が十分に機能していない可能性が高いことが示唆された。

本稿で考察を行う自由記述は、最後の設問で、「現在、セクシュアル・マイノリティの児童（生徒）や教職員への支援・配慮に関することでお悩みのことはありますか。また、小学校（中学校）におけるセクシュアル・マイノリティ支援・配慮について先生のお考えやご意見などがございましたら、教えて頂けませんでしょうか。以下のスペースに記入して頂けましたら幸

いです。」と教示して、学校長に回答を求めるものであった。

自由記述の内容

自由記述への回答は 310 校から得られた（小学校 179 校、中学校 131 校）。

そのうち、性的マイノリティに関する相談やトラブルなどの経験が「ある」ことに関する記述は 28 校（小学校 10 校、中学校 18 校）だった。

児童生徒に関しては、「相談がよせられて、担任が、守秘義務を守って、本人・保護者の希望・意向に沿って丁寧に対応した。」、「女子生徒からカミングアウトがあったので研修会を実施した。」、「以前、相談を受けたことがあるが、教師と子どもの信頼関係が一番大切だと感じた。」など。教職員に関しては、「トランスジェンダーの非常勤講師がいたが全く問題がなかった。」など。保護者では、「性的マイノリティの児童の保護者がそれを認めず、その結果、児童がトラブルを起こすようになった。」などに関するものだった。

一方、相談やトラブルなどの経験が「ない」ことに関する記述は 36 校（小学校 22 校、中学校 14 校）で、「今のところ、申し出がなく、対応する準備は整っていない。」、「該当する生徒や教職員がいないため、喫緊の問題として捉えにくい。」、「男子校だが、これまでそのような相談はよせられていない。」などであった。

これらの記述から、現状としては、相談を受けてから、はじめて、性的マイノリティへの支援に関する検討を開始する学校が多いことが伺える。すなわち、小中学校の性的マイノリティへの支援は、当事者からの相談・カミングアウトに依拠している可能性が高い。この場合、当事者からの相談が行われない限り、学校は、性的マイノリティへの支援や配慮の必要性を強く認識することは難しい。したがって、相談やトラブルなどの経験がない学校では、性的マイノリティの児童生徒の存在がなかなか認識されず、その結果として、性的マイノリティの児童生徒からの支援要請を適切に受け止めることができる学校の体制づくりが進みにくいことが予測される。

それでは、学校が性的マイノリティへの支援を充実させていくためには何が重要になるのであろうか。自由記述からは、主に学校の要因としては「研修の充実・機会の増加」、「人権教育の推進」、「連携の強化」が関係することが示唆された。

「研修の充実・機会の増加」（小学校 31 校、中学校 20 校）では、「現在のところ、セクシュアル・マイノリティの児童や教職員は本校に在籍していないようなので、悩みはありません。しかし、今後そうした児童や教職員が入ってこないとはいえません。私自身は、研修でセクシュアル・マイノリティの方の講演を聞いたり、カウンセラーの方の講演を聞いたことはありますが、本校職員の中にはそうした講演や研修を受けたことがある人はほとんどいないようです。研修の必要性を感じています。」、「セクシュアル・マイノリティの基本的知識を有していない教職員が自分も含めて多い。研修の機会が必要である。」、「以前はこの内容はタブー視されていたように思います。正しい知識を身に付ける機会がとても重要だと思う。」などであった。

日高（2015）が、教員約 6 千人を対象にした調査では、(1) 出身養成機関で、性同一性障害に関して学んだことがあると回答した教員の割合は 8.1%、同性愛については 7.5% と、学習経験の割合は 1 割未満だったこと、(2) 性同一性障害の生徒と関わったことがある教員の割合は 11.9%、同性愛の生徒については 7.5% であったことが報告されている。

筆者の調査結果（矢崎・本多、2018；Yazaki & Honda, 2018）からは、教職員向けの研修会を実施している学校は 3 割に満たないことが示されている。研修の充実・機会の増加は、教職員の知識不足を解消する効果をもつことから、性的マイノリティへの支援の充実を促す要因として捉えられているのだろう。

「人権教育の推進」（小学校 33 校、中学校 10 校）では、「セクシュアル・マイノリティの児童、教職員への支援は人権教育推進の立場から今後進めるべき問題であると考えます。」、「セクシュアル・マイノリティに特化せず、違いを受け入れる人権教育に力を入れていくべきである。」、「性に関することはもちろん、様々な多様性を大切にした教育に力をいれていきたい。」という声がよせられた。複数の記述が、多様性を尊重する人権教育の一環として、性的マイノリティに関する教育を含めることが望ましいことを指摘していた。

その中には、「人権教育のひとつとして学習する機

支援を充実させていくために必要なこと（回答学校数）

	小学校	中学校
研修の充実・機会の増加	31	20
人権教育の推進	33	10
連携の強化	10	10

会はありますが、特に取り上げて学習することはありませんでした。これは少しずつ学習する必要が、子どもも教師、保護者にもあると思います。」、「正確な知識を、教職員をはじめ、保護者等も学ぶ機会を位置付けることが必要です。人権教育の中に入れて学習させたいと思う。」などのように、児童生徒だけではなく、人権について教員や保護者も学ぶ必要性があることに言及したものもあった。

「連携の強化」（小学校 10 校、中学校 10 校）では、「学校としては『決まりを守る』というためには、わがままなのかどうかの見極めが重要になってくる。本人、保護者、関係機関との連携が大切である。」、「自分の性に対する違和感を感じる年齢にも個人差があると考えます。本人が相談できる環境と力のあるカウンセラーによってアドバイスを頂き、配慮できたこともあります。教職員が理解することと他の機関とも連携できることが必要であると思います。」、「公的機関で相談する場所がない。以前、県教委に相談したら、前例（LGBT の校内での対応）がないので、別の機関に相談してほしい、と言われた（たらいまわしの状態）。結局、専門家がいないので、自力で対応した。」、「外部との連携が難しいと思います。本人の意向を確認し、人権への配慮を最優先に考えていきたいと思います。」などのように、学校単独での支援には限界があること、外部機関との連携の強化を求める声がよせられた。

さらに、性的マイノリティへの支援を充実させていくためには、学校だけではなく「多様性を尊重する社会の実現」が重要であることを指摘する記述も多くよせられた（小学校 16 校、中学校 18 校）。

例えば、「学校の支援・配慮の体制づくりも大切だが、社会全体の体制づくりも同一歩調で進める必要がある。」、「悩んでおられる方々の思いが社会に伝わっていないと感じています。社会全体で人権などの取り組みが進んでいくことが大切であると思います。」、「セクシュアル・マイノリティに関する理解を児童、教職員、保護者、教育行政が一体となって推進する体制づくりが急務であると思います。全ての人が「自分事」として引き受ける環境づくりを学校だけに求めず、社会全体で担っていくことが一番大切と考えています。」、「学校だけではなく、社会全体でセクシュアル・マイノリティに対する理解を進めなければならない。学校が特殊なのではなく、社会の縮図が学校だと感じている」などの声があった。

調査では、「現在、セクシュアル・マイノリティの児童（生徒）や教職員への支援・配慮に関することでお悩みのことはありますか。」と教示をしたことから、自由記述には、教育現場での支援・配慮に関する戸惑いや悩みも多くよせられた。

その一つは、「性的マイノリティに関する教育内容」（小学校 4 校、中学校 3 校）に関する悩みであった。

例えば、「発達段階に応じて指導内容は違うはずだが、学年ごとにどこまで教えていいのか不安になる。人権教育の大切な一部分ではあるが、教師間の指導法研究がなされていない。」、「小学校の 6 年間は思春期の入り口となる時期です。高学年になると、性的な関心が高まる児童もいますが、全く関心のない児童もいるため、一斉指導が「やぶへび」になることを考えて慎重に進める必要があります。性についての興味本位の児童の発言が、他の児童を傷つけるようなことは絶対に避けなくてはならないと考えています。そんな理由から、悩みを受け止め、支えていける体制はしっかりとできていますが、積極的な指導には力をあまり入れられないでいます。」、「学校内、学級内に悩む生徒がいるかが分からない中で、安易に学習材料として授業に取り上げることに不安がある。当該生徒の悩みがさらに深まったり、一層心を閉ざさないか？　セクシュアル・マイノリティに関する知識のみが独り歩きをしないか？　十分な指導計画・内容でなければ、差別や偏見が拡大するのではないか？」などの意見がよせられた。

また「他の児童生徒への影響」（小学校２校、中学校３校）に関する悩みもよせられた。

例えば、「セクシュアル・マイノリティの児童がいた場合、他の児童へどう説明納得させればいいのか。」、「対象となる生徒がいた場合、他の生徒へどのように

理解を促していくのかが問題。」、「言葉遣いやしぐさが気になる男の子はいますが、周りの子がその子の言動や行動を認めているので、問題は発生していませんが、今後大きくなるについて、周りの友達との関係性がどうなるか心配です。」などの記述があった。

「学校の多忙化」(小学校５校、中学校６校）を訴える声もあった。

例えば、「本校の在籍生徒数から考えて、セクシュアル・マイノリティの生徒がいないはずはないのですが、生徒間、教師間でも認知されていません。教職員対象の研修会等を実施したいのはやまやまですが、他の取り組みや研修が多すぎて、時間がとれません。」、「該当する生徒とまだ出会えていないので対応を検討するまでいっていない。この時代、いつ対応しても困らないように準備をしなくてはいけないと考えているが、教員もあまりに多忙なため、前もって研修を受けるというところまで至っていない。」などであった。

さらに「施設対応の困難」(小学校４校、中学校５校）に関する記述も得られた。

例えば、「これから相談が増加するのではないかと思われる課題の一つと認識している。いまだ相談はされていないが、児童、保護者が相談しやすい雰囲気づくりからしていかないと、と思っている。ハード面（教室やトイレなど）の整備が必要だと思うので、市や国レベルでの予算のことなど、問題点の解決はこれからだと思われる。」、「教職員研修で先進的に取り組んでいる自治体の担当者に来ていただき学ぶ機会があった。声には出せないが、割合でいえば、どの学級、学校にも、セクシュアル・マイノリティの人がいるはずなので、カミングアウトしなくても、普通に生活できる施設の充実が望ましい。トイレの洋式化工事等の際に多目的トイレの充実を望んだが、予算が決まっていて、実現しなかった。」などであった。

学校長が、児童生徒が悩み事を相談しやすい学校づくりを目指していたとしても、多目的トイレが設置されていないなど、学校の施設面に課題があるところでは、性的マイノリティへの支援に関する検討が遅れがちになるのかもしれない。

その他の自由記述は、質問紙調査への回答からの気づき（「問題意識が低いことに気づいた。」「体制づくりの遅れを痛感した。」など)、情報提供への要望（「具体的な取り組み内容や成功事例を教えてほしい。」など)、調査に対するクレーム、今後の抱負や感想を述べたもの、などであった。

おわりに

昨今、教育現場では、性的マイノリティの児童生徒への支援や配慮が推進されつつあるが、実際の対応はそれぞれの学校に委ねられている。本稿では、小中学校の性的マイノリティへの支援の現状と課題について、全国調査の自由記述の回答からアプローチした。

主要な結果は、以下の通りである。

現状では、相談を受けてから、はじめて、性的マイノリティへの支援に関する検討を開始する学校が多い。性的マイノリティへの支援を学校が充実させていくためには、学校では「研修の充実・機会の増加」、「人権教育の推進」、「連携の強化」が重要で、学校だけではなく「多様性を尊重する社会の実現」が必要だと考えられている。

性的マイノリティへの支援や配慮に関する学校側の悩みとしては、ソフト面としては「性的マイノリティに関する教育内容」、「他の児童生徒への影響」があり、ハード面としては「学校の多忙化」「施設対応の困難」がある。

小中学校の性的マイノリティへの支援の現状は、相談を受けてから、性的マイノリティへの支援を検討する学校が多いことから、相談経験がない学校では、当事者の存在や支援の必要性がなかなか認識されず、支援要請に適切に対応できる学校づくりが遅れることが予測される。このことは、現状では、支援要請に対応できる学校と、対応が困難な学校に二分されていることを暗示する。学校間で性的マイノリティへの支援や配慮に格差がある状況は解決されることが望ましいだろう。

「研修の充実・機会の増加」の必要性を訴える声が多くよせられたが、この格差を解消するうえでは、支援要請に対応してきた学校がもつ知識や経験、ノウハウを共有することが有効だと考える。

その際は、「どのように人権教育に取り組んでいるのか」、「どのように関係機関と連携体制を構築しているのか」、「どのように性的マイノリティに関する教育を行っているのか」、「他の児童生徒への影響にどのように配慮をしたのか」、「どのように施設対応等のハー

ド面の問題をクリアしたのか」など、本研究で課題としてあげられたポイントについて情報提供を求めることが有効かもしれない。

【謝辞】

小学校に関する全国調査は、平成 29 年度上廣倫理財団研究助成金の支援を、中学校に関する全国調査は、平成 29 年度山梨県若手研究者奨励事業補助金（平成 29 年度山梨県大村智人材育成基金事業）の支援を受けた。全国調査の実施では矢崎胡桃さんの協力を受けた。ここに記して感謝を表する。

【引用文献】

日高庸晴（2015）. 教員 5,979 人の LGBT 意識調査レポート . http://www.health-issue.jp/kyouintyousa201511.pdf

日高庸晴（2017）. LGBT 当事者の意識調査：いじめ問題と職場環境等の課題 . https://www.lifenet-seimei.co.jp/newsrelease/2017/6638.html

文部科学省（2015）. 性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について（平成 27 年 4 月 30 日 27 文科初児生第 3 号）. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm

文部科学省（2016）. 性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）（平成 28 年 4 月 1 日）. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211_01.pdf

矢崎胡桃・本多明生（2016）. 小中学校におけるセクシュアル・マイノリティ支援に関するインタビュー調査 . 日本学校心理学会第 18 回大会 , 2016 年 10 月 1-2 日 , 名古屋大学 .

矢崎胡桃・本多明生（2017）. 山梨県の小中学校におけるセクシュアル・マイノリティ支援に関する実態調査 . 日本学校心理学会第 19 回大会 , 2017 年 9 月 16-17 日 , 筑波大学 .

矢崎胡桃・本多明生（2018）. 我が国の小学校におけるセクシュアル・マイノリティ支援に関する実態調査 . 日本心理学会第 82 回大会 , 2018 年 9 月 25-27 日 , 東北大学 .

Yazaki, K., & Honda, A.（2018）. Actual Conditions of Support for Lesbian–Gay–Bisexual–Transgender（LGBT）Students in Junior High Schools in Japan. The 40th International School Psychology Association（ISPA 2018）Conference, July 25-28, 2018, Tokyo, Japan.

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約６万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

資料室利用方法

【閲　覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。
【開室日・時間】月～金曜日 10：30 ～ 17：30
【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始　※この他、会議等で臨時に休室することがあります。
【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず１枚 10 円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。
https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html

収集文献・資料

統計･調査報告書、ジェンダー･フェミニズム、性教育一般･性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書･指導書･学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料･海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイアモンド文庫、ほか。
https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi

思いこみのめがね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義　Suzuki Shigeyoshi

公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。
専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

第11回
「ゲイという看板」
先生のカミングアウトとその後

「シゲせんせー、彼女いるの？」つい最近、またこの質問を受けました（笑）。

授業が始まって数分が経過し、高学年の女の子から突然この質問を受けました。私は頭の中で（えっと、えっと、どうしよう。彼女？　うーん、パートナーがいるよと答えれば嘘にはならないな。でも今は授業中だな。その話題になったら、授業が中断するぞ。きっと女の子たちから「え？　パートナー？」「パートナーって何？」って聞かれるな。自分は広くカミングアウトしているし、今ここで「シゲせんせーね、彼女はいないけど、彼氏はいるよ」って言ってもいいんだよなあ。いや待てよ。それを言ったら、きっと大騒ぎになるな。そうなると収集つかなくなるし、他の先生たちにも騒がしい様子が伝わってしまうかもしれないな。それは迷惑だな。うーん、どうしよう。困ったなあ。面倒だなあ）←すごくたくさん考えているように見えますが、5秒くらいの間にこれを心の中で考えています（笑）。

私が質問の答えを返さないのが女の子たちに不審に思われないように、ギリギリまで時間を稼ぎました。結局、女の子たちの質問にはダイレクトに答えずに、いつも通りの逆質問をしました。「あなたは彼氏いるの？」キョトンとする女の子たち。「えー、私たちに彼氏がいるわけないよ！」「まだ小学生だし！」そこで私はさらに質問を続けました。（質問される前にこちらが質問する。相手に質問の隙を与えない）、「じゃあ彼氏がいないなら、パートナーはいるの？」すると再びキョトンとする女の子たち。私が「あなたたち2人は友達パートナーみたいな感じなのかな？」と聞くと、女の子2人は顔を見合わせました。そして「確かに！　私たち2人は友達パートナーだね」と腑に落ちたようでした。「さあ、勉強を続けようか」と私。「シゲせんせー、彼女いるの？」の質問には全く答えずに、何とかその場をやり過ごしました。

12月号のコラムでも書いた通り、私は約2年半前に自分がゲイであることをカミングアウトしました。もうこれで誰に対してもオープンでいられると思いましたが、実際はそんなことはありません。常に「私はゲイです」という看板を首から下げているわけではありませんし、先生として仕事をしながら常にセクシュアリティをコミュニケーションの中心にしているわけでもありません。場所や相手によって、自分がゲイであることを「言ったり」「言わなかったり」「はぐらかしたり」「最適なタイミングを待ったり」「チャンスをうかがったり」しているのです。

昨年は何回か、私はテレビに映ったこともありました。それは福祉系バラエティ番組だったり、ニュース番組だったり。当然、保護者や同僚、子どもたちがそれを見たこともありました。翌日に学校に行くと「シゲせんせー、昨日テレビに出てたでしょ？　家族と一緒に見たよ」と言われたこともありました。悪いことをしているわけではないのに、未だに心臓がドキドキします。こういうときに私は「おお！　見てくれたのだね。ありがとう。見てどう思った？」と聞きます。すると、その低学年の男の子は「面白かった!!」と屈託のない笑顔で話してくれました。（面白かった？　どういうことだ??笑）

こういった子どもたちの発言を授業づくりに活かしたいなあと思うのですが、カミングアウトをして2年以上経っても、それは勇気がいると感じます。もっと同僚や保護者の学びや気づきを促したり、機会をつくったりすることが必要かもしれません。

カミングアウトが人生バラ色になると思っていました。全てに対してオープンになれると思っていました。しかし、まだまだその道のりは遠いようです。ですが特にそのことに悲観するわけでもなく、過度に期待するわけでもなく、これからも子どもたちと語りを通して共に学んでいくのだろうなあと考えています。

「シゲせんせー、彼女いるの？」「あー、彼女はいないけど彼氏はいるよ」「そうなんだー。彼氏どんな人？　カッコいいの？」小学校でこんな会話ができる日を楽しみにしています。

［岡山県倉敷市立船穂中学校］（上）

性の多様性を認め合う児童生徒の育成

岡山県倉敷市教育委員会が行った先駆的な取り組み

倉敷市は、美しい街並みの倉敷美観地区でも知られる人口約 48 万人の中核都市。平成 30 年度人権啓発資料法務大臣表彰では、岡山県倉敷市教育委員会が教員用の手引書として作成した「性の多様性を認め合う児童生徒の育成Ⅱ」が最優秀賞を受賞した。今回は、同教育委員会の取り組みとユニークなかたちで課題研究に取り組んだ倉敷市立船穂中学校を取材した。

「まず学習ありき」にしないための基本理念

岡山県倉敷市教育委員会人権教育推進室では「性的マイノリティの人権教育は、学校教育における急務の課題」とし、平成 28 年・29 年度の人権教育課題として小・中学校の先生方とともに「性の多様性を認め合う児童生徒の育成」に取り組んだ。

現在は自治体単位で取り組むところも増えてきたが、倉敷市はその先駆的存在だ。

性の多様性について授業で取り上げる際に、最初に現場がとまどうのは「教え方がわからない」「適切な資料がみつからない」ということだという。

そうした不安を解消するために、倉敷市教育委員会は、学校でどのように取り上げるか本格的な研究を行い、基本となる考え方を構築。平成 29 年度の手引書には、前年度の実践研究をふまえた 3 時間の学習モデル「倉敷モデル」を示すなどして、市内小中学校の研究委員 10 名の研究実践を主導・支援した。

研究当初は、『性の多様性』という言葉をインターネットで検索しても出てくるのは理科で学ぶ「生物多様性」という言葉ばかりだったという。

あえて『性的マイノリティ』や『LGBT』という言葉は使わず、研究主題に『性の多様性』としたのは、子どもたちに「遠い世界にいる誰かのこと」としてとらえずに、すべての子どもたちに自分のこととして考えてほしいからだという。

「LGBT について学ぶのではなく性の多様性を学ぶ。LGBT の人々について考えるのではなく、私たちの生き方を考える。私たちが目指したのはそのような授業です」。性の多様性という言葉の思いについて、倉敷市教育委員会人権教育推進室松尾真治主幹はこんなふうに語ってくれた。

倉敷市立船穂中学校
校長　大月　新一
生徒数 170 名
教職員数 26 名（不登校生徒支援員、NET 等含む）
（2019 年 2 月現在）

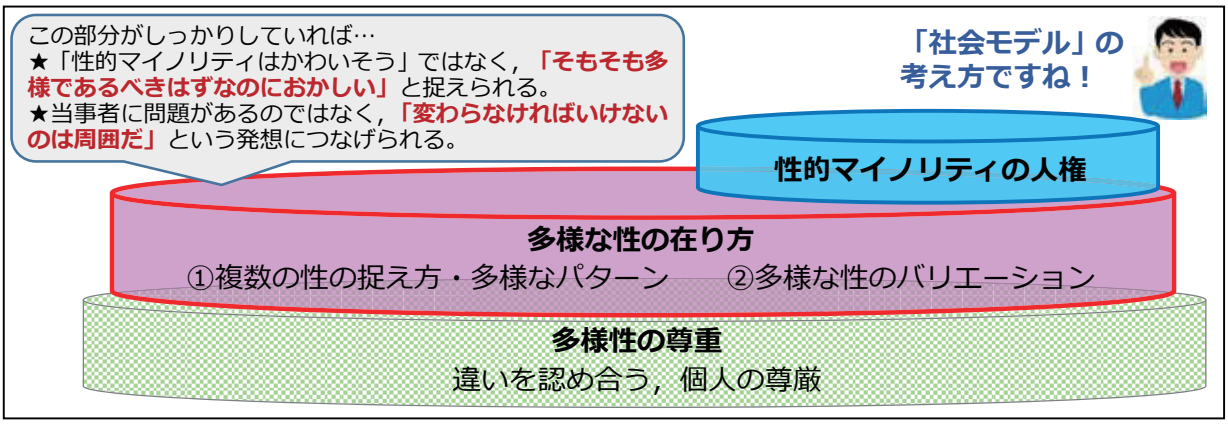
「素地づくり」の重要性

学習の前提としては、①教師の言動についての点検、②不必要な男女区分の見直し（例：名簿、呼称、役割分担など）、③違いを認め合い一人ひとりを大切にする学校経営、などの素地づくりが不可欠だという。

「先生方が『すぐにでも性の多様性に関する学習を実践したいので、指導案をください』と言ってくださることがあります。大変にうれしいことではありますが、まずは授業を行う前に 1 回は校内研修をされませんかとおすすめします。

なぜなら、互いの違いを認め合い、自分らしさを大切にする素地づくりが必要だからです」と松尾主幹。

たとえば、『女／男のくせに』とか『普通は異性を好きになるけれど』など、何気ない教師のひと言が児童生徒を傷つけてしまうことがある。そうなれば、どれだけ練り上げた学習を展開しても無意味になってしまう。また、唐突に「性的マイノリティ」とは、といった話から授業を始めれば、クラスの中の当事者探しにつながる可能性もあるという。



「性の多様性を認め合う児童生徒の育成」の学習構造

（人権教育実践資料３「性の多様性を認め合う児童生徒の育成Ⅱ」平成30年3月倉敷市教育委員会作成より。電子ブック版、PDF版を倉敷市ホームページhttp://www.city.kurashiki.okayama.jp/30449.htmよりダウンロードできる）

船穂中学校2学年「性の多様性について」の学習の全体像

教科・時間	単元名	内　容
道徳①	「ちがいのちがい」	・「あってよいちがい」、「あってはいけないちがい」について考えることで、決めつけや偏見の不当性に気づく。
道徳②	「本当に『あたりまえ？』」	・科学的根拠のない「思い込み」による偏見や差別が多いことに気づき、広い視野での認識を深めることの大切さを知るとともに、自分らしく生きることの大切さを知る。 ＊補助教材「ONE　STEP　UP」倉敷市市民局人権政策部男女共同企画参画課）
道徳③	「～男らしさ女らしさって何？～」	・性的マイノリティの人たちの気持ちや活動を知ることを通して、誰に対しても差別したり偏見を持ったりしないで関わろうとする態度を養う。
総合的な学習の時間④	「性の多様性ついて正しい知識を身につけよう」	・DVD教材やワークシートなどを利用して、LGBTに関する用語を正しく理解する。また身体や心、性的指向の有り様は人それぞれであること、すべての性的少数者の人々の性自認や性的指向の有り様を尊重すべきであることを理解する。
総合的な学習の時間⑤⑥⑦	「性の多様性について学んだことを伝えよう（調べ・まとめ）」 ＊「性的マイノリティ当事者へのインタビュー」（担当班生徒10名）	・一連の学習を通して学んだことの中から、「ぜひこれだけは知ってほしい」「このことは伝えよう」と思うことを中心に、班ごとに調べてまとめる（模造紙、パワーポイントなどまとめ方は自由）。 ・当事者にあらかじめ聞きたいことを考えておき、本校図書室で座談会形式でインタビューをし、当事者の思いを知る。
総合的な学習の時間⑧	「性の多様性について学んだことを伝えよう」	・２年A組は３年A組と１年A組へ、２年B組は３年B組と１年B組へに出向いて発信する。各クラス６班が６つの小テーマで発表。⇒授業終了後、感想を書いてもらう。
総合的な学習の時間（参観日）	「性の多様性について学んだことを伝えよう」(保護者に発表)	・参観日を利用して、各クラス、各班が保護者に向けて発信する。

さらに授業案をつくる際には、発達段階に応じた学習内容であることも重要なポイントになる。

「事前学習や校内研修を行って、教員一人ひとりが正しい知識を共有し、児童生徒に肯定的なメッセージを発信することが重要だと考えています」(松尾主幹)。

授業は、28 年・29 年度とも、それぞれ 10 校の小・中学校で行われた。どのような取り組みを行ったのか。初年度研究実践を行った倉敷市立船穂中学校でお話を伺った。

倉敷市立船穂中学校の取り組み

平成 28 年度人権教育課題研究委員の１人である倉敷市立船穂中学校の田中和子教諭は、研究課題が「性の多様性を認め合う児童生徒の育成」と決まって、当初はおおいにとまどったという。

「そもそも私自身、性の多様性についての知識がありませんでした。自分自身、偏見をもっているかどうかすらわかっていない、そんなところからのスタートでした」と田中教諭は当時を振り返る。

「本校生徒は各学年２クラスで構成されており、本校では、これまで性の多様性に関する授業に取り組んだことがありませんでした。そこで、担当学年だけでなく、全校生徒が多様な性について正しく理解できるような取り組みを考えました。学びのかたちは、第２学年の生徒が先行して正しい知識を身につけ、さらに自分たちで考えまとめたことを他学年のクラスに出向いて発表するスタイルをとりました」(田中教諭)。

ゼロからのスタートで始まった学習。教師も生徒もどのように学びを深めていったのだろうか。それについては、次号で紹介する。

（取材・文　エム・シー・プレス　中出三重）

多様な性のゆくえ

One side／No side ［22］

宮田 一雄
みやた　かずお
ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

十分な蓋然性の証明

セクシャルハラスメント（性的な嫌がらせ）は異性間でも同性間でもあり得るし、異性間の場合も男性から女性への一方通行とは限らない。

理屈では分かるのだが、私のような異性愛者のおじさんは、セクハラが話題になると、なぜか自分が責められているような気分で居心地が悪い。気の利いたことを言おうとして「それセクハラですよ」と注意されることもある。自ら墓穴を掘るというか……。

したがって、セクシャルハラスメントに関連する話題には及び腰で、なるべく避けたいという「おじさん心理」があることも認めざるをえないのだが、国連合同エイズ計画（UNAIDS）のセクハラ疑惑に端を発した混乱については、あえて取り上げておきたい。

UNAIDS のミシェル・シディベ事務局長は昨年 12 月 13 日、ジュネーブで開かれた理事会で、自らの任期を半年、前倒しして 2019 年 6 月末で退任する意向を示した。経過を手短に説明しておこう。

UNAIDS は昨年春に退任した当時の事務局次長のセクハラ疑惑への対処があいまいなままに終始したことから組織の在り方が問われ、独立の専門家委員会による調査が進められた。オーストラリア人権委員会のジリアン・トリッグス元委員長をトップに法律、人権分野の専門家 4 人で構成する委員会は昨年 12 月、その報告書を理事会に提出している。

多数の事務局スタッフからの聞き取りを踏まえ、報告書は UNAIDS の現状を『危機的であり、通常の業務にも支障が出ている』と述べている。そして『この沈滞を脱し、スタッフが自信を取り戻し、適切な手続きのもとに差別のない運営ができる組織に戻るには、実行力があり信頼のおける指導者を任命しなければならない』として速やかなトップの交代を求めた。

UNAIDS の実績は認めつつも、組織的にはカリスマ的かつ独裁的な指導者の『個人崇拝』と『えこひいき』により、『ハラスメントと権力の乱用に甘い』環境を生み出してきたという。これに対しシディベ事務局長は次期理事会が開かれる 2019 年 6 月まで現職に留まり、『秩序ある指導者の交代』を果たすことを希望した。何とか体面を保って辞めたいということだろう。

だが、UNAIDS は地球規模の HIV/ エイズ対策を推進するうえで、人権の重視を強調し、ジェンダーの平等を強く求めてきた組織である。シディベ事務局長に対する内外の風当たりはきつく、即時退任を求める意見は依然として残っている。

シディベ氏が早期退任を表明した直後には、CNN が『UNAIDS の主要資金拠出国であるスウェーデンは、シディベ氏が自ら去るか解任されるまですべての財政支援を控えると発表した』と報じている。財政的な圧力が強まれば、事務局長だけでなく UNAIDS の活動も窮地に追い込まれる。HIV 感染は拡大し、治療は普及せず、医学研究の進歩も期待できなくなってしまうのだ。『秩序ある交代』は難しいのではないか。

セクハラや権力乱用による被害申し立てについて、報告書は standard of proof（立証基準）は『balance of probability（蓋然性が十分に認められる）に基づけばよく、beyond reasonable doubt（合理的な疑いの余地がない）を求める必要はない』と勧告している。この点にも注目しておく必要がありそうだ。

他の分野と同様、法律にも詳しくなく、あいまいな理解で恐縮だが、beyond……は刑事裁判で適用される原則であり、検察側の立証に少しでも疑いを差し挟む余地が残る場合には、有罪は問えない。「疑わしきは罰せず」ともよく言われる。

一方で、balance of……は主に民事裁判で適用される。互いの主張や状況証拠も含め総合的に判断して結論を出す。51% 対 49% で訴えた人により説得力があるなあと判断できれば、訴えは認められる。

テレビのドラマでは犯人が「証拠はあるのか」と居直りだしたら、もうこれは逃れる道はないなと視聴者は思う。そんな感じだろうか。ちょっと違うか……。

訴える人の立場によって、基準は変わる。世のおじさん層もゆめゆめ「証拠はあるのか」などと言い出すことのないよう発想を切り替えなければならない。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

ぼくは、かいぶつになりたくないのに

こうき／絵　中村うさぎ／文
日本評論社
定価 1400 円＋税

独りで歩き始めたからこそ

私が新宿二丁目で営んでいるゲイバーには、いろんな境遇で育った若者がやってくる。恵まれた家庭に生まれた子もいれば、びっくりするような生い立ちをもった子もいる。同性愛というセクシュアリティの受け止め方も各々だが、家庭環境が複雑だったりすると、それはいっそう否定的な色彩を帯びる。

ある同性愛者の学生は、キリスト者の家庭に生まれ、厳格なキリスト教の教えのもとに育てられた。両親はずっと「同性愛は悪魔の所業だ」と語っていたので、思春期になってその欲望が自分のなかにあることに気づいたときには、絶望と罪悪感から鬱病になり、自傷行為が止まらなかったという。

別の青年は、両親には愛情を注がれて大きくなったが、母親の信じている新興宗教が同性愛を否定していることから、家族へのカミングアウトなど考えられないという。自分自身の欲望と、母親への感謝や愛情の間で、セクシュアリティを肯定しようにも肯定できないことで途方に暮れている。そうした家庭に育つ子供は、世間に同性愛を知られること以上に、家族にこそ絶対、自分を隠さなければならない環境に深く傷ついているのだ。

宗教ばかりでなく、親に暴力を振るわれて幼少期を過ごしたという話もけっこう耳にする。本書『ぼくは、かいぶつになりたくないのに』で自身の半生を描いたイラストレーターのこうきさんは、物心ついたころから、義父には存在しないもののように無視をされ（いわゆるネグレクト）、母親には幼い時分から暴力を振るわれた。再婚した実母と義父との間に生まれた弟は、両親に可愛がられ、たとえばこうきさんと違って誕生日は普通に祝ってもらい、その世代の子供が欲しがるゲーム機などをプレゼントされた。一方、こうきさんは安いタオルしかもらえなかった！　病気になっても介護されることもなく放置され、家族旅行にも一人連れて行ってもらえず、思春期に同性愛者であることが親に発覚すると、まるで汚いものにでも触れるように扱われた。

この絵本は、そんなこうきさんの苛烈な経験を、作家の中村うさぎさんが繊細な筆致で物語にしたものだ。ただ、それは虐待された子供の単なる経験や回復を描いてはいない。むしろ孤独な心がいつしか宿していた“かいぶつ”が主人公であり、その憎しみの化身に翻弄される痛みを表したのが、衝撃的なところだ。

文章を担当した中村うさぎさんは、タイトル『ぼくは、かいぶつになりたくないのに』の由来について、あとがきでこう記す。

「（筆者注・挿入されるイラストの）泣いている怪物の顔を見た時に、『ああ、この子は怪物になんかなりたくなかったんだよな』と思ったからだ。生きていくことは苦しくて痛い。だから、君たちは泣きながら怪物になっていくんでしょ。でもその痛みは君ひとりのものじゃないんだ。そのことを知って欲しい」

愛されないことで心の内側を蝕む憎悪は、いつしか自分をも“かいぶつ”にする。誰かを傷つけたい、否定したい！　という負の感情の連鎖。そんな自分の抱えた“かいぶつ”とどう向き合っていくのか。それは実のところ、少なからずの人間が抱えるテーマでもある。あなたも私も、そんな魔物を心のどこかに飼っていないか？

ラストは、主人公が家を追い出されてホームレス生活をはじめるシーンで終わる。それは悲劇的な結末ともいえるが、月明かりの下、ベンチに寝転ぶ主人公の表情は意外なほど柔和だ。そう、孤独な路上生活は見方を変えれば新しい一歩でもあり、居場所というのが家庭ばかりではないことの暗示でもある。独りで歩き始めたからこそ拓かれていく世界もあるのだ。そんな希望の光を主人公は夜空に見たのかもしれない。だからこそ、この物語の最後は、ハッピーエンドでないとはいえないのだ。

（作家　伏見憲明）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

▶▶ 3月3日（日）10：00～17：00 ◀◀

デートDV防止スプリング・フォーラム2019

今、なぜ デートDV予防教育なのか？

主な内容

＜午前の部 >10：00 ～ 12：30
行政説明「交際相手からの暴力防止のための取組およびストーカー総合対策の取組等について」内閣府男女共同参画局・警察庁生活安全局
基調講演「『裸足で逃げる』の若者たちの仕事・学校・日々のこと～暴力のない未来につなげるために～」
琉球大学教授上間陽子氏
＜午後の部 >13：45 ～ 17：00
(分科会 1)「調査研究・相談支援部門」「メール相談から見える妊娠に悩む 10 代とのかかわり方」
一般社団法人にんしん SOS 東京 松下清美氏・群馬大学 長安めぐみ氏
(分科会 2)「関連分野・啓発部門」ユースサミット「若者の恋愛・性のモヤモヤを考えよう！」
モデレーター・NPO 法人ピルコン理事長染矢明日香氏
全 体 会「予防啓発部門」大討論会「今、なぜデート DV 予防教育なのか？～私たちは何を伝えたいのか？」
コーディネーター・NPO 法人デート DV 防止全国ネットワーク 事務局長 阿部真紀

会　場　日本財団ビル（東京都港区赤坂 1-2-2）

問合せ先等

主　催／NPO 法人デート DV 防止全国ネットワーク・認定 NPO 法人エンパワメントかながわ
参加費／4,000 円（学生無料、デート DV 防止全国ネットワーク正会員 3,000 円、賛助団体［２名まで］3,000 円）　定　員／200 名
申込・問合せ先／NPO 法人デート DV 防止全国ネットワーク（認定 NPO 法人エンパワメントかながわ事務所）
メールまたは FAX にて、E メール ddvbousinet@yahoo.co.jp　電話 045-323-1818　FAX 045-755-7007

▶▶ 2019年3月10日（日）13：00～16：50 ◀◀

知っているようで知らない～性の健康セミナー

主な内容　あなたは分かっていますか？　女性の悩み・男性の悩み　『性の悩み』のいま

13：10 ～ 13：40　『わが国の少子化、その原因を徹底分析』
講師：北村邦夫（一般社団法人日本家族計画協会理事長・家族計画研究センター所長）
13：45 ～ 14：45　「あなたが知らない性の悩みの世界～女性編～」
講師：丹羽咲江（咲江レディスクリニック院長）
14：55 ～ 15：55　「あなたが知らない性の悩みの世界～男性編～」
白井雅人（順天堂大学医学部附属浦安病院泌尿器科准教授）

会　場　御茶ノ水ソラシティ　カンファレンスセンター２階 sola city Hall（東京都千代田区）

参加費・問合せ先等

主　催／一般社団法人日本家族計画協会
受講料／1,080 円（税込）
定　員／300 名
対　象／医師、保健師、助産師、看護師、看護教員、養護教諭、薬剤師、薬局関係勤務の方など
問合せ先／〒 162-0843　東京都新宿区市谷田町１－10 保健会館新館　一般社団法人日本家族計画協会　研修担当
TEL　03-3269-4785　URL　http://www.jfpa.or.jp

►► 3月23日（土）～24日（日） ◄◄

GID（性同一性障害）学会　第21回研究大会・総会

The next step in next decade

法律、保険、そしてその先へ

主なプログラム

会長講演「時を繋ぎ、技を紡ぐ」難波祐三郎　（岡山大学病院 ジェンダーセンター長）

シンポジウム１「性別適合手術のためのメディカルツーリズム」
座長：佐々木掌子（明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻）
演者：難波祐三郎（岡山大学病院 ジェンダーセンター）中西祐貴（大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科人間科学専攻）中島　紫（SOPHIA BANGKOK CO.,Ltd.　日本支部）

シンポジウム２「MTF 者の声の治療　～ボイストレーニングの特色～」
座長：古西隆之（岡山大学病院 総合リハビリテーション部　言語聴覚士）
演者：武田由美（株式会社芸術療法研究所）櫻庭京子（獨協医科大学埼玉医療センター）古西隆之（岡山大学病院 総合リハビリテーション部）

シンポジウム３「性別違和を持つ子どもにどう対処するか」
座長：松本洋輔（岡山大学病院 ジェンダーセンター 精神科神経科）
演者：松尾真治（倉敷市教育委員会人権教育推進室）　佐々木掌子（明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻）岩本健良（金沢大学人文学類）志田陽子（武蔵野美術大学造形学部）

ワークショップ「ジェンダークリニックの立ち上げ方と当事者の声」　ほか

会　場　岡山県医師会館（岡山市北区駅元町 19-2）

問い合わせ先等

参加費：医師・看護職・心理士・教師等資格取得者・研究者 10,000 円
一般（上記以外）3,000 円　学会入会金（年会費）：2,000 円
大会事務局：岡山大学形成再健外科学（岡山市北区鹿田町）　TEL086-235-7214
運営事務局：株式会社キョードープラス　担当：宗野 康一　〒701-0205 岡山県岡山市南区妹尾 2346-1
TEL 086-250-7681　FAX 086-250-7682　E-mail gid21@wjcs.jp
詳しくは　http://www.convention-w.jp/gid21/

►► 聞こえる人、聞こえない人どちらにも伝わる動画 ◄◄

LGBT の理解を広めるDVD「11歳の君へ」と「HIV/ エイズ予防啓発動画」

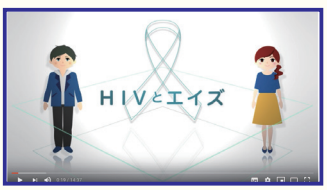
私は名古屋出身で生まれつき耳が聞こえません。19年間、ろう・難聴者を取材し、ドキュメンタリー映画制作をしてきました。LGBTの中には聞こえない人たちもいることを知り、DVD「11歳の君へ～いろんなカタチの好き～」を制作しました。

（今村彩子 Studio AYA 代表）

DVD3,800円・上映権付21,600円（税込）

https://studioaya-movie.wixsite.com/11kimi/

● 聞こえる人、聞こえない人も分かる HIV/ エイズ予防啓発動画



HIV 感染者の中にはろう者もいることを知りました。しかし、既存の HIV/ エイズ予防啓発動画にはほとんど字幕と手話がついていません。

（手話と字幕・音声ナレーション付）

YouTube は、https://youtu.be/_vlFAnDXV6M
ダウンロード版は以下から（自由にダウンロード可。上映の許可不要）
https://studioaya-movie.wixsite.com/11kimi/hivaidsyoboumovie

若者の性にかかわる行動、規範意識、情報源などが、
この６年間でどのように変容したかがわかる。
若者の性を理解するための必須の資料！

緊急出版 !!
全国調査による
最新のデータ

青少年の性行動

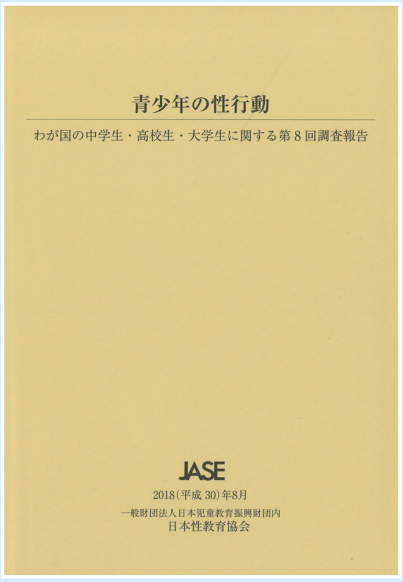
わが国の中学生・高校生・大学生に関する第８回調査報告

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第８回青少年の性行動全国調査」委員会

日本性教育協会では、1974 年に第１回調査を開始し、以来ほぼ６年ごとに「青少年の性行動全国調査」を行ってきました。日本の青少年の性行動や性意識の変化を全国規模で把握することができる貴重な調査データとして国内はもとより国際的にも認知されています。

このたび、2017 年６月から同年 12 月にかけて実施した「第８回青少年の性行動全国調査」の単純集計がまとまりましたので、一次報告として刊行しました。主要な結果「デート経験」「キス経験」「性交経験」などの解説と、全質問の中学生・高校生・大学生の男女別集計結果が掲載されています。

※なお、今回の調査に詳しい分析を加えた報告書「『若者の性』白書 第８回青少年の性行動全国調査報告（仮題）」につきましては、2019 年刊行予定です。



A4 判　80 ページ

頒価：1,000 円

送料は別途。詳しくは JASE ウェブサイトで確認してください。

JASE ウェブサイトよりお申し込みいただけます！
https://www.jase.faje.or.jp/pub/seikoudou8.html

※インターネット環境にない場合は、JASE(電話 03-6801-9307）までお問い合せください。

●本書に関するお問い合せにつきましては、下記までお願いいたします。

一般財団法人 日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
〒 112-0002 東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビル B１
TEL 03-6801-9307　　FAX 03-5800-0478
Mail info_jase@faje.or.jp　URL https://www.jase.faje.or.jp

JASE